



6

2022
June

No. 512

World Conference of Religions for Peace Japan



ウクライナ周辺国 現地調査報告から



こころの扉—「信仰と教えの体現」森 伸生	2
ACRP執行委員会	3
ウクライナ周辺国 現地調査報告	4
「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」 2022年度第1回フォローアップセミナー開催	5
2021年度公開連続講座「核時代における非戦」	6
第2回平和研究所研究会	6~7
青年部会主催「青年の集い」開催	7
青年部会 Communi Heartプロジェクト第5回プログラム	8
今月のWCRP新熟語、WCRPの活動	8



「信仰と教えの体現」

私が東京モスクでイスラームに入信したのは1973年夏であった。大学4年生のころである。イマームはトルコ人のアイナン・サファー老師であった。入信の儀式を終えて、おもむろに同老師はおだやかな口調でイスラーム信徒になったことを祝福して、さいごに「イスラーム信徒になったならば悩みはなくなりますよ」と教えてくださいました。当時の私にはその意味するところが分からないままに、時が過ぎ去り、マッカの大学で学ぶことに

WCRP 日本委員会
平和研究所 所長
拓殖大学 大
イスラーム研究所 所長

森 伸生



なった。

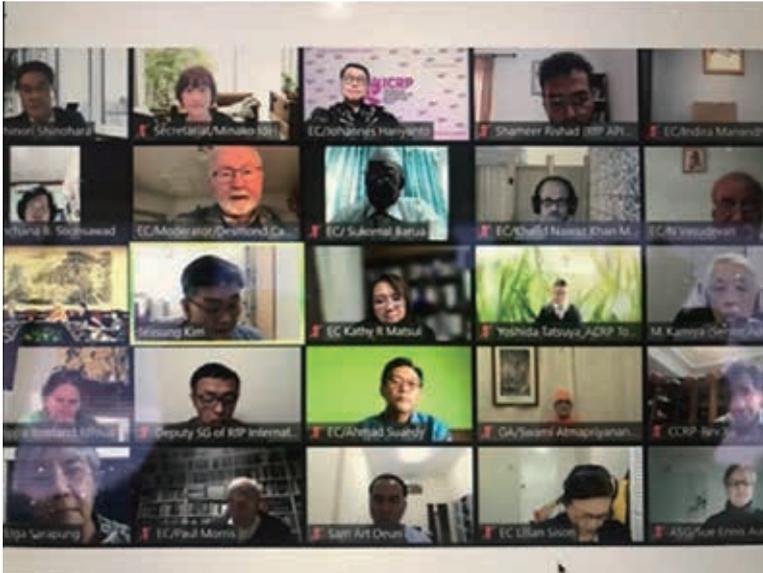
マッカでの学生生活は毎日、イスラームの啓典・クルアーンと預言者ムハンマドの言行録・ハディースの講義づけであった。マッカのイスラーム仲間が私がイスラームを理解するのを辛抱強く待ってくれた。そのうちに、少しずつ神にすべてを委ねるとはどのようなことが分かってきた。そんな中で、同老師の言葉がふと甦ってくるがあった。未だ悩みは尽きぬが、その真意が

分かってきた。ハディースに「信仰には七〇以上、もしくは、六〇以上の部分がある。その最善なるものは、アッラーの外に神はないと証言することであり、最も小なるものとは道路から邪魔になるものを片付ける行為である。羞恥も信仰の一部である」とある。信仰のすべての部分が完成したときに、悩みはなくなるのであろうと分かった。その逆に信仰に欠けている一つ一つが悩みとして心に残ってくるのであろう。信仰の構成部分とは何なのか、明らかにされていないが、日々の生活の中で見つけていくことになる。そこで、預言者は最も簡単な行為を示されており、それに倣って信仰の完成に努めるように促していると思われる。

イスラームとは別に、仏教の言葉に目を向けると、そこには常日頃、耳にする、一〇八の煩惱という言葉がある。その教えの中では、人の生きていく中で多くの悩みへの対処の仕方を教えているのであろうと知ることが出来る。言うなれば、イスラームの信仰の色々な部分を別の表現として論じた信仰の体現方法であろうかと思えた。どの宗教でも信仰を裏付けとして人格形成の在り方を示していることが分かる。それぞれの教えで生きてきた人びとのなかで、その教えが体現されるならば、誰もがより幸せな生活を送ることが出来るであろう。しかし、時には立場によっては、信仰に欠けた部分で他者に大きな被害を与えてしまうこともある。世界各地の武力衝突報道に接するたびに、その欠けた部分に互いに気づくことを祈ってやまない。

ACRRP 執行委員会

アジア宗教者平和会議（ACRRP）は5月10、11の両日、2022年度執行委員会をオンラインで開催した。デスモンド・カーヒル実務議長（オーストラリア）、篠原祥哲事務総長ら20カ国からオブザーバーを含む約50人が参加した。WCRP日本委員会からは執行委員の植松誠理事長（日本聖公会主教）、黒住宗道理事（黒住教教主）、松井



ケティ平和研究所所員（清泉女子大学教授）、國富敬二理事（立正佼成会理事長）が出席した。

執行委員会では、2021年度の事業・決算報告や事業・予算計画が審議された。また、昨年10月に開かれた第9回ACRRP大会で採択された東京宣言を実行するためのアクション・プランが策定された。これは、①フラッグシップ・プロジェクト（重点活動）の実施②効果的なパートナーシップの構築③ジェンダー平等の推進④諸宗教教育の実行⑤国内委員会の開発⑥資金調達の促進——を図るもの。

日本委員会から三千万円の財的支援が行われたフラッグシップ・プロジェクトの実施は、より行動的活動体をめざすACRRPにとって中核となる事業だ。現在、このフラッグシップ・プロジェクトは、女性、青年ネットワークと三つの国内委員会で実施されている。

- ・アジア太平洋女性信仰者ネットワーク（APWofN）による人身売買防止、平和構築と和解、環境保護のための啓発事業
- ・アジア太平洋諸宗教ネットワーク（APIYN）による青年リーダーシップ開発プログラム

- ・タイ委員会によるデジタル時代の平和に向けた民族・諸宗教の調和促進事業
- ・フィリピン委員会による貧困先住民の健康のケア事業

- ・インドネシア委員会による気候変動についての世論喚起

また執行委員会では、人事事項としてACRRP運営について諮問を行うアドバイザー委員会委員が選出され、WCRP/RfP国際共同議長を務める庭野光祥師（日本委員会理事、立正佼成会次代会長）やチャールズ・ボー師（カトリック枢機卿、ミャンマー）が就任した。ACRRPの財的基盤を支えるACRRPトラスティーズの委員には、実業家のビジェイ・バジャラチャリア氏（仏教徒、ネパール）ら3人の委員が就任した。

米国・ニューヨークから参加したWCRP/RfP国際委員会の副事務総長を務める根本信博師（立正佼成会参務）は、現在のグローバルな諸課題やそれに対応する国際的な諸宗教対話・協力活動の現状について説明。そして、今後は国際委員会とアジアやアフリカなどの地域委員会の連携がさらに必要になると力説し、その強化を呼びかけた。

ウクライナ周辺国 現地調査報告

現在のウクライナ情勢を受けて、WCRP日本委員会はウクライナ支援募金を3月から開始した。この支援金の活用に向けて、5月4日から13日まで、WCRP日本委員会はウクライナ周辺国で難民受入などの人道支援に関する現地調査を行った。

視察したのはモルドバ、ポーランド、スロバキア、ルーマニア、ハンガリーの5カ国。現在、600万人を超えるウクライナ難民は、こうした周辺国での避難生活を余儀なくされ、その国の政府をはじめ国連、NGO、市民団体などが受け入れを行なっている。



今回は、聖エジディオ共同体、フォコラーレ運動、ユニテリアン・ユニバースリスト協会、サレジオ修道会などを訪問した。モルドバでは、キシナウ市内外の7カ所で避難所を運営し、難民

受け入れを行っているサレジオ修道会を視察。避難所には、合わせて約350人が滞在しており、避難所以外で暮らす約250世帯の難民家族にも食糧・生活必需品の配布を行っている。ウクライナからの避難者は女性と子どもが大半を占めるため、より家庭的な場所での滞在を求める傾向が強いという。

ポーランドでは、聖エジディオ共同体とフォコラーレ運動を訪問。同共同体がワルシャワで支援を行う難民受入センターは行政によって運営されており、約250人の難民が滞在している。その内の約150人が子どもだ。同共同体は、週3回から4回、支援プログラムを提供しており、子どもたちに学習支援と遊びを通じた精神的ケアなどを行っている。フォコラーレ運動の視察では、難民受入を行なっているワルシャワ郊外に位置するマリアポリ・フィオーレを訪問。ここには、これまで最大30人が滞在中、現在は17人（子ども8人）が滞在しており、長期にわたる滞在者が多い。衣食住の提供、精神的ケア、家族的な関わりを持つことを大切にしている。とくに子どもは、心の傷が見えにくい面があるため、アートセラピーなども活用してケアにあたっている。スロバキアでは、コシシエでカトリック教区が難民を受け入れている施設を訪れた。ここでは、フォコラーレ運動の多くの会員が受け入れボランティアとして関わっ

ている。現在、48人の難民を受け入れており、そのほとんどは母子だが、未成年者だけで避難してきたケースもある。また、衣食住の生活支援だけでは不十分で、心の癒し、抱擁することなど心のケアが必要であり、そのためには信仰的な価値観が重要なことである。

WCRP日本委員会は、これらの現地調査やWCRP国際ネットワークとの意見交換を踏まえ、支援金を最も必要としている



人々のために活用する。現地で人道支援を行う団体への財的支援に加え、WCRP日本委員会として現地ボランティア派遣などを実施する予定。こ

これらの支援内容については随時、ホームページや会報で報告する。

※

3月15日から開始したウクライナ支援募金に対し、5月31日現在、4501万8435円のご寄付を賜りました。真心からのご支援に感謝申し上げます。また、紛争の長期化に伴い、支援募金を8月31日まで延長いたします。

「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」2022年度 第1回フォローアップセミナー開催

和解の教育タスクフォース主催「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」の2022年度第1回フォローアップセミナーが5月7、8の両日、栃木県のアジア学院で開催された。本セミナーは「平和と和解のためのファシリテーター養成セミナー」の第1期（2017～2018）、第2期（2020～2021）参加者のフォローアップ研修及び交流の場を目的としている。スタッフを含め26人が参加し、『ともに生きる』をテーマにアジア学院の豊かな自然の中で食といのちの大切さを体験しながら、いのちの尊厳、多文化共生等を学んだ。



ワークショップ

1日目は荒川朋子講師（アジア学院院長）、山下崇講師（アジア学院職員）より『キャンパスツアー&フードライフ』をテーマに、アジア学院創立の理念について学んだ。アジア学院は途上国の農村開発に携わる人材を養成する国際機関として発足。東南アジア諸国で既に農村開発に携わっていたキリスト教会と



ジェフリー講師

キリスト教団体の要請に込めるとともに、宗教的背景の異なる農村指導者を学生として招いてきた経緯を説明した。その後、参加者は「キャンパスツアー」として広大な土地の中にある野菜畑、鶏舎、豚舎を回り、有機肥料作りから、野菜や家畜を育て、収穫から調理、リサイクルまで行う、自然とともに共生するアジア学院の循環システムを学んだ。次のセッションではアジア学院の豚肉・鶏肉や野菜を使い、多文化体験ができる「インドカレー作りワークショップ」を行った。ベロ・ルイパ講師（アジア学院職員・宣教師）が食前の祈りを捧げ、参加者にとって、フードライフで学んだ「いのちを頂く」との大切さをかみしめる時間となった。

2日目は「朝のフードライフワーク」をテーマに農作業としてルバーブ畑の草刈りを体験。雑草も家畜の飼料としてリサイクルするため、土がつかないように鎌で刈るレクチャーを受け、アジア学院の循環システムを体験する機会となった。次に、ジェフリー・メンセンディーク講師（桜美林大学）が、尊厳に関するワークショップを行った。ジェフリー講師はまず、尊厳と尊敬の違いについて説明。尊敬は「対外的な評価や称賛を受けること」で人から与えられる「ものであるのに対し、尊厳は「生まれながらにして、誰もが持っており、他者が



草刈り

奪うことはできないもの」と強調。そして、尊厳の定義について「生きるものすべての価値と弱さを認めて受け入れることからくる内面の平安である」と述べた。さらに、他者から認められたいという承認欲求や、周囲の環境に合うように、自身の考えや行動を変える過剰適応をすることは、尊厳を侵害する行為であると説明したうえで、自らの尊厳を保つためには「弱さを受け入れる強さ」が重要なポイントであると指摘。自らの尊厳を保つためには弱さを認め、向き合うことが重要だと強調した。その後、グループ別ワークで互いに感想を共有し、セッションは終了した。

また、両日の振り返りのファシリテーションをセミナーの参加者が担当し、参加者同士の交流やファシリテーターとしてのスキルアップを図った。

参加者からは「一人は、自然の繋がりと循環の中に生かされていることを知って学びになった」「自然と自分の命が繋がっていることが体感できた」「食といのちに向き合うことの大切さを学んだ」「尊厳という概念は、昨年のセミナーで学んだ修復的正義とも関連すると思ひ、今後の研究を通じて理解を深めていきたい」などの声が寄せられた。

2021年度公開連続講座

「核時代における非戦」

WCRP日本委員会と日本パグウォッシュ会議、明治学院大学国際平和研究所が共催する公開連続講座「核時代における非戦」の第4回が3月19日、オンラインで開催され、これに132人が参加した。テーマは『核大国アメリカの課題：戦争文化を変容させることの困難と希望』。

冒頭、WCRP日本委員会として挨拶した篠原祥事務局長は、現在のウクライナ危機に触れ、「WCRPは欧州の宗教者とも協力して平和的解決を模索している。グローバル社会に生きる私たちは、一人ひとりには微力だが無力ではない。戦争文化を変容させることの困難と希望について学び、



そこから有意義な行動の糸口を見つけていきたい」と語った。

基調講演は、デューポール大学の宮本ゆき教授が務めた。宮本教授は、「暴力と自衛をめぐる論説」や「暴力の可視化の論理」を説明し、ダイベスト運動や市議会での条約、N

GOの行う取り組みなどを例に挙げ、そうした困難の中にも希望の光があると語った。その後、シカゴ大学のノーマ・フィード名誉教授がコメント。また、視聴者からの質問に講演者とコメントーターが回答した。

※この会合の動画は、日本パグウォッシュ会議のホームページで視聴できます。

第2回 平和研究所研究会

金子 昭所員

平和研究所の第2回研究会が5月17日、普門メディアセンター（東京・杉並／オンライン併用）で開催された。金子昭所員（天理大学おやさと研究所教授）が、『対立と分断を乗り越えるロシアの宗教思想―キリスト教哲学者ニコライ・ベルジャエフを手掛かりに―』と題して発表した。

金子所員は、このテーマを題材に選んだ理由として、同研究所の西原廉太副所長（立教大学総長）の発表（3月29日）『ロシアによるウクライナ侵攻とその背景にあるキリスト教』と、ホアン・マシア所員（元上智大学教授）の発表（4月19日）『教皇フランシスコ「われわれ皆兄弟」にみる戦争反対論』の内容に触発されたと胸中を披露。

そのうえで、「ロシアによるウクライナ侵攻という悲劇的な事態に対して、宗教思想から何らかの打開策のヒントが見いだせないだろうか」という問題意識を持ち、「現代



金子所員

の戦争に宗教的言説が利用されないためにも、まずその宗教的言説を正しく理解して再発信する必要があると思う。この問題

をロシア20世紀のキリスト教哲学から考察してみたい」と語り、論説を展開した。

はじめに、プーチン大統領が2014年のクリミア半島侵攻前に、高級官僚ら5千人に贈った3冊の本を紹介。その内の1冊の著者がイヴァン・インリン（1883年～1954年）ロシアの哲学者）で、「ロシアは将来のキリストによる救済の場」であり、「ロシアはファシズムから世界を救うのではなく、ファシズムによって世界を救う」という思想から、全ヨーロッパをロシアの保護国とするという歴史的哲学の持ち主として、「非常に危険な幻想を根拠にしている」と金子所員は批判した。このインリンの主張をプーチン大統領は思想的バックボーンとしており、プーチン大統領が1990年代に政治的な登場をするまでは、ほとんど無名の存在だったという。

もう1冊の著者がニコライ・ベルジャエフ（1874年～1948年）ロシアの哲学者）で、1922年に当時のソ連からインリンと共にドイツへ追放されている。ベルジャエフの著作『不平等の哲学（邦



研究会の様子

「霊的終末論」を説いたと述べた。金子所員は、「これがベルジャーエフ本来の哲学思想で、その哲学全体をきちんと読んで自らの指導理念にすれば、外郭ではなく、ロシアの思想の中から、人間や社会のあり方の内在的転換への視点が見いだせるはずだ」と語った。そして、心地よいフレーズを拾って「社会的な保守主義を正当化する理由付けにはならない」と警鐘を鳴らした。

また、ベルジャーエフの「自由」を踏まえた歴史哲学の視点から、「キリスト教的神政や帝国主義もまた全体主義であり、この一元論により霊の自由はたえず否定されてきた」とし、どの立場においても「自らだけが唯一の正統の擁護者であると主張するのは熱狂主義者である」と語った。

そして、「我々に求められるのは、どこまでも人間尊重の立場に立ち、怨恨や熱狂な

しに思想を確立して、現実を見つめること
の大切さではないだろうか」と述べた。

青年部会主催「青年の集い」開催

青年部会は「つなぐ・ひろげる Beyond Yourself」をテーマに「青年の集い」を5月14日、立正佼成会付属佼成図書館視聴覚ホール（東京・杉並）で開催し、青年部会幹事、関係者、WCRPに関心のある青年など約30人が参加した。

大西英玄副幹事長（北法相宗音羽山清水寺成就院住職）の開会挨拶に続き、八坂親准幹事（中山身語正宗青年本部長）がファシリテーターとなり、「愛」をテーマに参加者それぞれの信条に照らし合わせた自己紹介と交流を行った。

次に、『今は昔、諸宗教協力の秘話』と題し、青年部会の第5代幹事長を務めた三宅光雄師（金光教泉尾教会会長）が、これまでの世界大会や青年部会の諸活動における体験を語



体験を語る三宅師

った。また、幹事長時代に携わった青年部会20周年記念式典のエピソードを紹介。企画を進める中で

「青年の考えることと大人の考えることに若干の差があった」と述べた。さらに、当時WCRP日本委員会事務総長だった叔父の三宅美智雄師の「しなきゃいけない20周年ならやめた方がよい。自分たちがしたいことだけすればよい」という言葉を紹介し、青年たちを励ました。

続いて、八坂幹事と吉田恭子事務局員がファシリテーターとなり、ワークショップを行った。これは五つのグループに分かれて、ウクライナ情勢や自殺予防などの社会問題に対して、問題の背景や原因を議論し、具体的な行動に結びつけるもので、グループごとに、SDGsの目標と合わせた、未来へのコミットメントを発表した。最後に杉谷義恭幹事長（天台宗国際平和宗教協力協会専門委員）が閉会挨拶を述べた。



ワークショップの様子

かった話を聞くことができ「普段接することのできない様々な宗派の方と接することができ、貴重な体験をすることができた」などの感想が寄せられた。

青年部会 Communi Heartプロジェクト 第5回プログラム

第5回コミュニケーションプログラムが5月29日、普門メディアセンター（東京・杉並）で開催された。最終回である今回は『痛み』や「悩み」と向き合う』をテーマに初めて対面で行われ、日本の伝統的な修復技法である「金継ぎ」から着想を得たワークショップを行った。ファシリテーターを務めた館野庸子幹事（解脱会）とマリアアントニエッタ・カスツリ幹事（フォコラーレ運動）は、欠けたり割れたりした陶器を人に見立てて、痛みや傷があっても金継ぎが施されると、以前よりもずっと魅力的で、世界でたった一つの自分という「宝」に昇華されることを伝えた。参加者はこれまでの歩みを振り返り、自分の痛みと向き合う



金継ぎされた手紙を手に分かち合いをする参加者。裏にはこれまでの思いがこぼれている



入国手続き。CAからのメッセージが書かれたピザを受け取る

あるからこそ輝く人生があるのかもしれないことを、改めて思い起こした。

続いて行われた修了式は、客室乗務員に扮したスタッフより、全5回のプログラムを修了する「飛行機の着陸」が告げられた。参加者はイミグレーションにて入国ビザを受け取り、この旅を通して「自分が変わった」「人生の選択肢が広がった」「諸宗教の姉妹ができた」など自分が得たもの、そして新たな旅への抱負を語った。



ご搭乗ありがとうございました！

今月のWCRP新熟語

WCRP事務局が日常の中で感じたことを漢字2文字で表し新しい熟語を作ります。

支善（しぜん）

WCRP日本委員会の活動は、自然の中の活動も多く、そこでは自然に支えられながら、善く生きていることを感じます。

WCRPの活動

《6月》

- 2日 理事会（東京・立正佼成会法輪閣／オンライン併用）
- 7日 平和研究所所員会議・研究会（東京・普門メディアセンター／オンライン併用）
- 10日 気候タスクフォース「WCRPいのちの森プロジェクト」森の整備（埼玉・所沢）
*27日も作業
- 21日 評議員会（京都・キャンパスプラザ京都）
- 22日 女性部会委員会
- 23日 災害タスクフォース会合（東京・普門メディアセンター）

掲載内容の無断転載を禁ず。